

# 鳥取県における酪農経営の展開と

## 危機のなかでの諸組織の対応

高野山大学 谷 口 浩 司

鳥取県の酪農の本格的展開は戦後に入ってからである。明治乳業が大山町に工場を開設したのは戦前であり、乳牛の導入により酪農家が一定育っている。しかし、もともと鳥取県は和牛（因伯牛）の生産地として知られ、農家には白いまだらの入った牛に対する抵抗がかなり強かったという。ところが、戦後二十年代の後半から一転して牛飼いの農業は和牛から乳牛へと変化していく。

県下の酪農生産にはいくつかの特徴がみられる。現段階における地域の特徴は、同時に歴史的展開過程をも物語っている。鳥取県は大きくは鳥取市を中心とした東部、倉吉市を中心とした中部、米子市を中心とした西部に区分され、東部及び西部は中国山地に入りこんで東南部、西南部の山間地域としてさらに区分される。中国地方で最も高い大山（一七一一米）は、伯耆富士の名のとおり、県西部から中部に位置しているが、その山麓が主要な酪農専業地帯になっている。（しかし、地域的にみて、進捗状況に変化がみられる（表1）。）西伯郡大山町に明治乳業が工場を開設したのは戦前であり、東伯郡東伯町には戦後まもなく明治乳業に対抗して、伯耆酪農農業協同組合（後の大山乳業農業協同組合）が設立される。戦後日本の基本法農政がもたらした農村と農業の危機は、選択的拡大の

（表1） 地域別飼養状況

ア 飼養戸数

（単位：戸、%）

年 地域	35	40	45	46	47	48	49	50	51	進捗率		県計に占める割合 (51年)
	51/35		51/45									
鳥取	990	724	390	350	260	200	180	150	142	14.3	36.4	7.8
八頭	205	205	140	140	100	90	80	80	70	34.1	50.0	3.8
倉吉	1,805	1,984	1,630	1,560	1,300	1,050	1,020	810	800	44.3	49.0	44.0
米子	1,989	1,772	1,370	1,260	1,090	890	730	700	720	36.2	52.6	39.6
日野	108	254	180	180	140	110	100	80	88	81.5	34.6	4.8
計	5,097	4,939	3,710	3,490	2,890	2,340	2,110	1,820	1,820	35.7	49.1	100.0

「オトシ子」とも呼ばれる酪農に最も早く頭在化しているし、大資本との対抗関係もまた明示的である。鳥取県の酪農はこれらの点を典型的といえる程に物語っている。

明治乳業と伯耆酪農（大山乳業）との対抗関係は戦後まもなくから現在に至るまで続いているが、「高度成長」政策のなかでの農政が大資本への奉仕であるなら、その大資本と直接的に闘いながらなおそうした農政を挺子にして経営

1 飼養頭数

(単位：頭，%)

年 地域	35	40	45	46	47	48	49	50	51	進ちょく率		県計に占める割合 (51年)
										51/35	51/45	
鳥取	1,403	1,466	1,550	1,630	1,510	1,510	1,510	1,510	1,530	109.1	98.7	12.9
八頭	286	578	850	900	920	880	880	900	820	286.7	96.5	6.9
倉吉	2,917	5,298	6,580	6,770	5,800	5,380	5,300	4,790	4,900	168.0	74.5	41.2
米子	2,941	4,327	5,400	5,260	4,600	3,920	3,910	3,860	4,210	143.1	78.0	35.3
日野	307	655	840	840	770	510	500	440	440	143.3	52.4	3.7
計	7,854	12,324	15,220	15,400	13,600	12,200	12,100	11,500	11,900	151.5	78.2	100.0

を守つてきた農協組織とそれに結集する酪農民の、したたかさ、もうかがい知ることができると。昭和三十年大山山麓が集約酪農地域に指定され、一地域一工場の指定は明治になされ、伯耆酪農は調整工場となる。三十年代の酪農の成長期に明治と伯耆酪農は對抗関係を強めながら、いわゆる「過剰生産」のなかで公布された四十年の「加工原料乳生産補給金暫定措置法」とそれともなう「指定生乳取引団体」の決定をめぐつて、県下の酪農史の流れを

変える闘いを演ずる。

当時明治乳業への出荷農家の組織である大山酪連と伯耆酪農は共に単独組織で県下の過半数の生産量をカバーしては、他の生産農家をいかにして引き入れるかでしのぎをけずるが、伯耆酪農が県東部の二つの酪農組合を吸収合併し、指定団体となる。名称は明治乳業への出荷組織である大山酪連が県酪連となり、伯耆酪農は大山乳業に変わり、全国でもきわめて特異な組織形態をとることになる。その後五十年には明治乳業は鳥取工場を閉鎖し、岡山工場管轄下の集乳所に切り換えるが、他方で市乳処理工場として山陰明治を出荷酪農団体の資本出資で米子市に新設する。

「過剰生産」のなかで取引条件の変更をめぐつて明治乳業への出荷農家の大山乳業への加入問題が生じるが、本報告は、こうした歴史的展開過程と地域的特徴について、大山乳業に組織されている東伯町の「集落と明治乳業の出荷している大山町香取開拓部落の調査をもとに行なうものである。

さらに酪農の危機の進行が他方での東伯町農協の急激な成長と重なっている点についても言及する予定である。周知のように東伯町農協は「生産から加工・流通」に至るまでの事業体制をしいて、地域農業の先取りとまで注目されている全国有数の総合農協である。専門農協としての大山乳業ならびに開拓団としての機能をも兼ねる必要のある香取開拓農協を、東伯町農協のような巨大農協と比較しながら、農民にとつての農協とは何かの闘いのなかから、「農村自治」についていささかなりとも言及できればと考えている。